京の清水寺を模して天海大僧正が寛永8年（1631）に建てた清水観音堂（重文）。上野戦争の戦火から逃れた寛永寺現存最古の堂。江戸時代には庶民に親しまれ、歌川広重の「名所江戸百景」に描かれている。

歌川広重『上野清水堂不忍ノ池』（国立国会図書館蔵）

不忍池辯天堂。琵琶湖に浮かぶ竹生島の宝厳寺を模した堂で、天海大僧正が寛永年間に建立した。かつては舟で島に渡っていた。

上野大仏。初代の大仏は漆喰で造られたが地震で倒壊。青銅で再建されたものの関東大震災で首が落下。今は受験生の信仰を集める。

【東叡山寛永寺9月の行事】

根本中堂 秋期彼岸会 施餓鬼大法要
（秋分の日）

ご先祖様が赴いた彼岸（悟りの世界）に思いを馳せ、すべての霊を供養する法要。

不忍池辯天堂 巳成金（みなりかね）大祭
（今年は9月15日）

一年で一番金属に縁がある巳成金の日に金運上昇などを祈願する法会。

た。世界的にも有名になった上野の花見は、この時から始まったのです。

天海大僧正が境内に名所を造ったのは、気軽に旅に出られない庶民に上方の名所を愉しませ、それによって仏教に親しませようという意図がありました。

いっぽう寛永寺は家綱公の時代に後水尾天皇の皇子、一品守澄法親王（ぎょうぼうしゅちょうほうしんのう）が山主（住職）として入山し、門跡寺院としての格式を得ました。そして、寛永寺の法親王は比叡山と日光山の山主も兼任することとなり、天台宗のみならず日本の宗教界全体を統括することとなったのです。

元禄11年（1698）には第5代将軍綱吉公が間口・奥行きともに40メートルを超える根本中堂を寄進するなど、寛永寺の発展はその後も続き、第八代将軍吉宗公の時代には30を超える堂塔と36坊の子院があり、境内の広さは30万5千坪（100万平方メートル余）に及びました。

また、歴代将軍のうち六代の将軍が境内に葬られました。

戦火によって多くの堂が失われてしまったのは残念ですが、今も寛永寺の諸堂は人々の信仰を集めています。

「寛永寺をひと回りすると、主要な御利益がみんないただけるのです」

と宮部さん。

具体的には、薬師如来をご本尊とする根本中堂は心身の健康、開山堂は厄除け、清水観音堂は子授け・子育て、不忍池辯天堂は学芸の上達、上野大仏は受験合格とされます。たしかに人生の主要な願いはかなうようです。

「寛永寺を訪れる理由は人それぞれでしょうが、できれば最初に根本中堂を訪れてご本尊様を拝していただきたい。それから時間の許すかぎりお堂をめぐって御利益をいただいてください」

歴史を知った上でお参りすると、上野の景色もまた違ってみえるでしょう。

お寺巡りをさらに愉しむ！ 仏像の見方 基本の「き」 菩薩編

菩薩とは悟りを求める者のことで、如来（仏）になるために修行する者のことをいいますが、観音・地蔵といった有名な菩薩は人々を救済するためあえて菩薩でいるとされます。なぜでしょうか。

人々に寄り添い救ってくれるもっとも身近な〝仏様〟

菩薩は正しくは菩提薩埵（ぼだいさった）といい、菩提（悟り）を求めて修行する者をいいます。もとは修行時代のお釈迦様のことを指すものでしたが、大乗仏教が広まると仏教の修行者すべてに使われるようになりました。

しかし、信仰の対象になっている菩薩は、観音菩薩や地蔵菩薩など如来（悟りを得て仏陀となった者のこと、狭い意味での仏）になれる智慧と徳をもちながら、あえて菩薩にとどまって人々を救済する〝仏様〟をいいます。

これらの菩薩は広大な慈悲心をもつゆえ、自らの悟りより人々の苦しみを除くことを重視しているのです。時には衆生の身代わりになって苦しみを受けることさえあります。

菩薩は修行時代のお釈迦様がモデルなので、髪が長く装飾品を身につけるのが特徴です。上にあげた四菩薩のほか普賢菩薩、虚空蔵菩薩、日光菩薩、月光菩薩などがあります。

【菩薩の主な種類】

地蔵菩薩
六道で苦しむ者を救う菩薩

お釈迦様の入滅（死去）から弥勒菩薩が仏となるまでの無仏の期間、六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天）に迷うものを救う菩薩です。とくに子どもを救うといわれます。僧の姿に造られるところに特徴があります。

聖観音菩薩
さまざまな姿で人々を救う

正しくは観世音菩薩または観自在菩薩。さまざまな姿に変身して人々を救う慈悲の菩薩です。阿弥陀如来を補佐して極楽浄土に導くともされます。聖観音は十一面観音・千手観音・馬頭観音などに化身する前の姿です。

文殊菩薩
お釈迦様を補佐する智慧の菩薩

「三人寄れば文殊の智慧」といわれるように、すぐれた智慧をもつ菩薩です。普賢菩薩とともに釈迦如来像の脇侍（両脇に立つ像）とされます。童子の姿とされることが多く、剣を持って獅子の背中に座ります。

弥勒菩薩
お釈迦様の次に如来となる菩薩

お釈迦様が入滅して56億7千万年後に、悟りを開いて如来になる菩薩です。思惟する姿に造られるのは、最後の修行を表しているとされます。如来の姿をした弥勒仏もありますが、これは悟りを開いた未来の姿を表したものです。